

氏名	渡邊 益 宜
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 4674 号
学位授与の日付	平成25年 3月25日
学位授与の要件	医歯学総合研究科機能再生・再建科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Multiple Regression Analysis for Grading and Prognosis of Cubital Tunnel Syndrome: Assessment of Akahori's Classification
(肘部管症候群の病期分類と臨床成績の多変量解析：赤堀分類の評価)

論文審査委員 教授 大塚愛二 教授 木股敬裕 教授 千田益生

学位論文内容の要旨

【はじめに】肘部管症候群の術前病期分類である赤堀分類を数量的に評価し、臨床効果との関連性を検討した。

【対象と方法】1997～2004年までに単純除圧術を行った肘部管症候群52例57肘を対象とした。その内訳は、男性39例、女性13例で、年齢28～88歳（平均64.3歳）、赤堀分類1期:3肘、2期:19肘、3期:17肘、4期:12肘、5期:6肘であった。術前と術後6ヵ月の臨床所見をもとに、赤堀分類を従属変数とした数量化理論I類による回帰式を導き出した。そして、赤堀分類を術後成績に当てはめた結果（術後赤堀分類）と臨床成績を比較した。

【結果】術後成績は、優33肘、良16肘、可6肘、不可2肘であった。病期の決定には感覚神経伝導速度を中心に多数の項目が有機的に絡まっていた。回帰式は高い信頼性（ $R=0.922$ ）を得た。術後赤堀分類と臨床成績には関連性を認めた。

【考察】赤堀分類は、麻痺の程度や術後臨床成績を評価する有効な診断基準である。また、今回の回帰式を予測式として活用することで、煩雑な赤堀分類を単純化し、再現性を高められる可能性がある。

論文審査結果の要旨

本研究は、肘部管症候群の術前病期分類である赤堀分類を数量的に評価し、臨床効果との関連性を検討するために、52例57肘を対象に、術前と術後6ヵ月の臨床所見をもとに赤堀分類を従属変数とした多変量解析を行い、回帰式を導いたものである。導かれた回帰式を検証したところ、高い信頼性が確認され、術後赤堀分類と臨床成績に関連性が認められたことから、赤堀分類が麻痺の程度や術後臨床成績を評価する有効な診断基準であることが数量的に確認された。このことは、今後、煩雑な赤堀分類を単純化し、より実用的な分類評価法の確立に寄与するものと評価され、この分野における重要な価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。